

# 学校が育てているもの

## —9.11 同時多発テロ事件への対応に思う—

能力開発ニュースNo.55 **時評** (2001年11月) より

研究開発部 矢口みどり

「数学の授業中にね、私たちこんなふうになんか問題解いているだけでいいのかなって思っちゃった。」  
同時多発テロ発生から2,3日たった夕食のとき、高校1年の娘がそう言った。

同時多発テロと、その後のアメリカの対応、日本政府の対応は、言葉には言い表しがたい衝撃と怒りと疑問と不安の渦の中に私たちを巻き込んだ。「どうしてこんなひどいことを」「なぜアメリカに」「報復は正義か」「日本は報復の支援をして良いのか」「日本も戦争に巻き込まれるのか」、どう考えたら良いのか、どんどん進行していく事態に何もしないでいいのか。娘の言葉は、そうした居ても立ってもいられぬ思いの表れである。恐らく、日本中の大多数の子どもたちがそうした状況にあつたのではないか。

私が問題にしたいのは、こうした不安と疑問と混乱の中にいる子供たちに対して、学校はどう対応すべきかということである。中学2年の息子のクラスでは、テロ発生の翌日、国語の担当教師が「いやあ、大変なことが起きちゃったねえ」と言つて、彼が事件から受けた思いを授業の中に1分ばかり述べたのが、1か月半を経過した今日までの唯一の対応であった。何回かあった朝礼や学年での集まりでもこの問題には何も触れられなかったという。

10月中旬の保護者会でそのことを話題にした私に、息子の担任教師は、「問題が難しすぎる」「答えがない問題には対応できない」それに「第一、忙しくてやってられない」「数学の時間を割いてやるっていう問題でもないでしょう」と答えたのである。そして、私にそういう話はここではしないでほしいと、強い調子で言ったのだ。

私は何も「答えを出せ」とか「問題のすべてをわからせてほしい」などと言っているのではない。そんな簡単な問題でないことは重々承知だ。まず、子どもたちがどんなショックを受けているか、それを聞いてやって欲しいのだ。どんな不安を持っているか、どんな疑問を持っているか、どんなことを考えているかを聞いて、それを受けとめてやって欲しいと言っているのである。そして、こうした問題に対して、どういう視点を持つ必要があるか、どういう姿勢で立ち向かうかを指導してもらいたいのである。

現実の問題は、たいていがむずかしい、そして結論はわかっていないのである。そうした問題、目の前で起きている問題について、子どもたちが子どもたちなりに調べ考え、子どもなりに出来ることはないか、と考えて行動していく、そのヒント、行動のしかたを育てて欲しいと言っているのである。

息子たちは、昨年総合的学習として「国際理解」というテーマに取り組み、各国の料理や音楽の違いなどについて調べ発表した。しかし、「国際理解」という問題をそこで終わらせないでもらいたいのである。「国際理解」というのは、そんな生やさしいものではないからである。

今度の多発テロ事件は、まさに国際理解の問題なのである。国際理解というものは生やさしいことではない、ということを知るだけでも意味がある。民族、国家、宗教、産業と経済、国と国の関係、そしてそれぞれの歴史などさまざまなことをとらえる必要がある、ということがわかるだけでも意味がある。それらをとらえて、共に歩む道を見つけていくことが自分たちのこれからの課題だ、とつかめるように手助けしてやっ

て欲しいのである。それは、学校で歴史や地理や経済、政治、そして言葉などを学ぶ意味をつかむことにもなる。

「暇がない」「答がない」「むずかしすぎる」として、目の前の現実の問題、しかも子どもたちが大いに関心を寄せている問題から目をそらせて、進学準備のための勉強だけをやらせるとしたら、それは、問題を先送りし、自分には関係ないと人任せにする人間をつくり、自分の身に火の粉が降りかかってきてからあわてて対策を考えたり、人（他国）がどうするかを見てからでないと対応できない、そうした人間を育ててしまうことになるのではないか。いや、今までそうしてきたから、今のこの国の状態を生んでいるのではないか。

これは、学校ばかりでなく、各家庭そして社会の問題でもある。大人が子どもに向き合う、その向き合い方の問題である。

\*本原稿は、能力開発ニュースNo.55 時評に加筆・修正したものである。